

空

平成30年7月31日発行

第16卷3号

通巻第79号

空



2018・6・7

**SORA** 79号

直方 曾根 富久恵

墓終ひ五句  
霾や石屋も来たる墓終ひ

料峭や頭はな墓の水臭く

湿りたる遺骨の重さ春浅し

春陰や嗚咽の夫と骨壺と

彼岸僧と濡れし遺骨を干す話

福岡 三井所美智子

刃を入れて塩鮭の紅現るる

白梅や空の青さを誰も言ふ

路地ごとに恵比須の在す雛巡り

菊根分土の匂ひが好きになり

ぽきと折り枝衝へゆく巢組鳥

北九州 児玉 充代

春北風の吹きあつめたる星の数

花の雨今日があとかたなく暮るる

単線の鉄路錆る別れ霜

山川のたどりつきたる春の海

西空の透けて夕くる初桜

直方 石橋 幾代

仏間にも鬼の気配や豆を打つ

立春の音たててゐる竹林

紙雛袂を広げ流れゆく

魚市の魚は鈍色冴返る

手を差し出して恋猫に嫌はるる

大阪 井上 和子

潮焼けの手より神酒を大旦  
春光や巫女の袂の膨らみて  
手触りのよきぐい呑みを買初に  
畳紙の春着の金波立ち上がる  
娘の春着孫の春着へ風通す

岡垣 田中とし江

きさらぎやぎいと島押す浮棧橋  
杖ついて水平線の朧かな  
水の面へはみ出す芽吹き艇庫開く  
春祭了へて塵なき宿場町  
春の風観音さまの朱唇より

北九州 河原 敬子

連山のひとつ明るし御開帳  
街道に買はずにをれぬ蓬餅  
春水をざぶざぶ使ひ魚市場  
祖母のもの母より我へ牡丹の芽  
弟訪へば子のぞろぞろと桃の花

大阪 田岡 千章

日脚伸ぶ試歩に自讃の掛け声を  
春隣乗らぬ自転車磨き上げ  
窓広き処方薬局春隣る  
ステッキの手艶光りや春隣  
節分の日の高くある長湯かな

京都 天谷翔子

はぐれぬやう結びし雛流しけり

脱ぎ捨てし春の愁ひをまた拾ひ

さくらさくらさよならの手のひらひらと

げんげんや少女はすぐに手をつなぎ

指輪ほどの水輪がふたつ忘れ潮

福岡 亀井紀子

木蓮の光の中に身を入るる

爽やかに諾ふ夫よ桜餅

醜男のごとき新馬鈴薯並びけり

舞妓らの裾摘みてゆく夏の月

夏めくや飾り窓より手の伸びて

直方 吉田悦子

再発か夫・高熱と怯えし夜の虎落笛

恋心忘るるために毛糸編む

山眠る九十六の母笑ふ

連れ立ちてデートのつもり歳暮買ふ

よさこいを父のどてらの中で聞く

兵庫 大西乃子

囀や積木の家の赤白黄

亀鳴くや南海トラフやや動き

野遊びや呼び合ふ声の乱反射

山門の門堅き白椿

春の日の夫の知らない遊びかな

兵庫 青木 朋子

渡り来て命果てたる鴨一羽

寒月の空へと帰る一羽かな

尾長鴨見惚れてをれば見返さる

立春や卵の殻の道に落つ

藁にひかり真つ直ぐ届きけり

東京 今井 康子

あたたかや襦袢はづせば子の逃ぐる

お座りのすぐに傾く雛の前

くれなゐの薔薇の新芽や君逝けり

夫呼べばもう消えてをり春の虹

法螺貝に山のもの芽動きだす

宮崎 田代 民子

節替り参道に売る焼き鯛

火打ち石の火もて始まる節分会

年の豆打つ神の年男

追儺仕舞ひ鬼門封じの矢を放つ

端なれども仏にも年の豆

福岡 あさなが 捷

飲み足りてまだ動く口端午来る

捕虫網ゆがめり生傷は絶えず

ちぢれ毛のはりついてゐる夏帽子

諍ひに少し離れて金魚玉

ドラキュラの棺開けられし昼寝覚

北海道 押田裕見子

階段の軋む音して寒に入る  
寒波来る三日の糧を貯へて  
氷点下二〇度とても生きて食ふ  
娑婆の業断つに呑み干す寒の水  
反物の色目を合はす春隣

福岡 田代貞香

良き顔に老いてゆきたし蓬餅  
「或るところに」より始まる童話冬の月  
ふらここやかたかたと鳴るランドセル  
古民家の開かずの井戸や桜まじ  
陽炎や明日のことは神まかせ

神奈川 窪みち子

雪囲解きて日の射す梯子かな  
三月の塔は午睡か雲の中  
無口な友花片栗を好きといふ  
春の雷金柑ジャムを煮てをれば  
菜の花にまみれて恋を告げられし

兵庫 えとう樹里

流水の近づいてくる匂ひかな  
水仙やもう行かなくてよい母の家  
木の芽雨一降りごとに忌日くる  
朝の日や巢つばめの喉ふるへあふ  
あたたかやおしろい塗らるる辻仏

北九州 横田敬子

隙間風家族のごとく住みつきぬ

猫の名で呼ばれる医院春隣

探梅や俳人らしき人ばかり

初蝶を花に紛れて見失ふ

ビル街にわが青春や鳥の恋

東京 山田正子

サラダボール春の光をまぜにけり

噂やトースターのパンはね上がる

落椿並べてありぬ寺の縁

なごり雪背中合せの駅の椅子

菜の花や山は日暮れにさしかかり

東京 遠山のり子

余寒なほ雨滴にくもるガラス窓

校庭を木々が遠まき山笑ふ

真青な空ぱつちりと犬ふぐり

舞ひおりて触るるばかりに紋白蝶

犬ふぐり川の向かうは隣村

福岡 樋口みのぶ

楼門の乾く手触り松の芯

春めくや釣果を囲む二三人

紫陽花の白が盛りよ裏鬼門

黒南風や俳句の遺る備忘録

ひまはりにお辞儀してゐる男の子

空集抄  
柴田佐知子抽出

湯上りのやうな子猫のかたまれり

高倉和子

野火埃たちまちあたり暗うする

永淵恵子

重なりて板の音なり受験絵馬

岸洋子

夜桜の端の一人が消えてをり

吉田 菫

蝶羽化したちまちくもる蛹殻

深川淑枝

咲き満ちてさくらみしみししてゐたる

戸栗末廣

聖堂と言ふ春遅きところかな

角野良生

母の日の掌にこそばゆきひよこかな

中田みなみ

初老とは爪に縦筋日永し

曾根富久恵

列島のすみずみ晴れて桜どき

千波 悠



春泥の靴詫ぶる客迎へけり

退屈てふ幸せな窓春の海

田水張り村ひろびろと明けにけり

乳母車押してみたい児麦の秋

郭公や神樹残りて村滅ぶ

声聞けば恋に落ちさう寒椿

硬山に牛駆け上るお田植祭

花の雲思ひ出してはならぬ恋

涅槃図の巻き皺さへもありがたく

茎立のぶつきらぼうになりにけり

まつさらな耳と目が欲し寒の月

木々の間にひかる曇や梅探る

海鳴りのとどく熊野の椿山

石橋幾代

大西乃子

原友子

小林朱夏

山内碧

吉田悦子

宮井知英

仲里奈央

松田明子

山本則男

青木朋子

田中とし江

井上和子

箸を手に白寿居眠るシクラメン

入院の窓に若葉の押し寄する

地虫出てすぐに地球の上歩く

よく晴れてさくらさくらと水のごゑ

大夕立楽器のやうに街鳴らす

二股の大根すぐに踊りさう

菜の花の黄に溺れゆく落暉かな

調教の手綱みじかき桜東風

掌に置けば飛びさう雲雀の巣

割印に段差ありけり鳥曇

焼餅屋の薄き座布団笹子鳴く

春耕や土踏む古稀の土踏まず

春泥にまみれて戻る消防団

林 徹也

苑 実耶

織田 高暢

兒玉 充代

星加 鷹彦

横田 敬子

山田 正子

田代 民子

石川 子熊

田岡 千章

西住 三恵子

小島 翠波

古賀 真理



栄螺籠海の光を放ちけり

荃立やけふるがごとく淡路島

溪谷の色に蕨の茹であがる

奈良巡る春の寒さを託ちつつ

花びらの奥より暮るる白牡丹

花辛夷残して村の暮れゆけり

峰雲やするりと替はる太鼓打

顔よりも大き綿菓子百千鳥

解体に鉄線の叢寒戻る

旅終へて片手残りし皮手袋

食卓に二人の湯呑み夕ざくら

屋上の出世地藏やすすめの子

花ふぶき母と歩きし日のやうに

窪みち子

岡村尚子

原由子

王丸弘子

本多トミ

田中素直

あさなが捷

えとう樹里

三井所美智子

村上典子

倉智万数雄

早出保子

大谷政光

# 空作品評

柴田佐知子

湯上りのやうな子猫のかたまれり

高倉 和子

目も見えるようになった子猫たちが、遊び疲れて眠っているのだろうか。子猫たちのかたまりには、ももいろの鼻や柔らかい足の裏も見えているだろう。へ湯上りのやうなは意表をついた表現だが、ふわふわとした美しい子猫の命を包み込むようにやわらかく捉えている。

重なりて板の音なり受験絵馬

岸 洋子

合格祈願の絵馬が吹かれて音を立てたのであろう。受験生は勿論だが、その家族の思いも籠った絵馬である。作者はその音を板の音なりと一言い切りいたって素気ない。どんな思いが籠ろうと板は板の音を立てる。こうもあつさり言われると何だか可笑しくなってくる。

今号は桜を詠みこんだ作品が多かったので七句ぬきだしてみた。あらゆる方向から詠まれており、それぞれ自由自在だ。

夜桜の端の一人が消えてをり

吉田 葎

桜のもつ妖しさ。夜桜なら尚更だ。へ端の一人が消えてをりは先に帰ってしまった一人なのかもしれないが、神隠しに会ってもおかしくないと思える花の夜なのである。

咲き満ちてさくらみしみししてゐたる 戸栗 末廣

ひとひらもこぼさない満開の桜が見えてくる。へみしみししてゐたるによって桜が圧倒的な存在感を持つてくる。

列島のすみずみ晴れて桜どき 千波 悠

へ列島のすみずみ晴れてという思い切りのいい表現に驚く。これを受け止めている下五のへ桜どきがいい。たとえばへ桜かなであったら、大見得を切ったような大袈裟な印象を与えたであろう。それをすつと躲した季語の選択に、悠さんの鋭敏な感性が見てとれる。へ以下略

# 空集

## 柴田佐知子選

探梅や青空近きところまで

福岡 高倉 和子

美しく別れしはずの春シヨール

羽搏きて波立つ池や春夕べ

湯上りのやうな子猫のかたまれり

整へし畝にたつぷり春の雨

新社員思はぬ声を発しけり

逃避行して来しやうな花疲れ

山焼のはるかに勢子の点在す

福岡 永淵 恵子

号音につぎつぎと野火放たるる

縦横に戦火のごとく野火走る

熱風を連れ立ちあがる野火襖

立ちあがる山火の奥の山火かな

ウォータージャケットの水補給して野焼勢子

野火埃たちまちあたり暗うする

春炬燵老いて頷くこと多き

してもらふことに慣れずよ路の臺

探梅やぬかる足元ばかり見て

重なりて板の音なり受験絵馬

春星や余生の見ゆる眼鏡欲し

別人のやうに芝焼取りしきる

寒明けや墳すれすれに鳥の腹

使はれぬ甕つづくまるよなぐもり

うららかや古墳の横に保育園

巣作りや身の丈余るもの啞へ

夜桜の端の一人が消えてをり

怒り癖ついてしまひぬ羽抜鶏

探梅や隠沼に来て風窪む

初蝶や湖青々と横たはる

蝶羽化したちまちくもる蛹殻

福岡 岸 洋子

粕屋 吉田 菫

北九州 深川 淑枝